

悩ましい本である。

氏は生きる意味を問う「実存的問い」を、

最も人間的な行為とする。また、

中年期の危機とは、「社会的自己実現」の悩み

を持つ青年期と違って、ある程度

社会的役割を果たした人生の後半に

湧き上がってくる「私は私らしく生きて

きたらどうか」といった、社会的存在を超えた

一個人間存在としての「実存的問い」に向き合う

悩みだという。青年期には重要に思えた

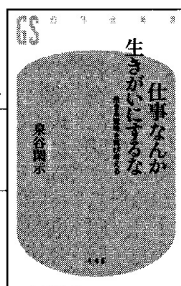
「社会的」とか「自己」といったものが、必ずしも

真の幸せにはつながらない「執着」の一種

に過ぎなかったことを知り、一人の人間として

「生きる意味」を問い始めると言っただけだ。また、

泉谷氏は、会社や生活等のために生きるのをやめ、心のおもむくままに日常を遊ぶよう勤める。教職に就く者にとっては、



泉谷閑示 著

842円 幻冬舎新書

☎03-5411-6222

仕事なんか生きがいにするな
生きる意味を再び考える

今日では、青年期においても、そのような「実存的問い」が見られると言う。

氏は、イソップ物語のアリとキリギリスの例を示す。わが国では、サブカルチャーにおいては世界をリードする勢いを持っているが、カルチャーそのものについては十分ではないとし、キリギリスのような、

耐える文化を生み出すことが、現代の虚無に押し潰されたいめに求められているという。

評者は考える。多くの子どもたちはサブカルに走り、教師もそれを受け止めなければならぬ。文化は押しつけでは育たないからだ。しかし、個に応じた指導

を考えるならば、生きにきさを感じながらも「実存的問い」や正統派の文化を追い求めるタイプの子どもたちに対しては、イソップ物語のアリのような「未来」だけでなく、キリギリスのような「今」の充実のための支援を検討する必要がある。

(聖徳大学教授・西村美東士)